

十津川第一・第二発電所

運転開始から60年 地域と共生

カーボンニュートラル（温室効果ガス排出量実質ゼロ）に向け、太陽光や風力発電などの再生可能エネルギーに期待が集まる。長い歴史を持つ水力発電もその一つ。むしろ元祖「再エネ」として、いま再び脚光を浴びている。

P R

J パワー

日々の努力が支える「元祖」再エネ

三つの課題

雨量の豊富な紀伊半島南部に立地するJパワースの十津川第一・第二発電所（奈良県十津川村）は、世界遺産である熊野古道の一部で「川の参詣道」とされている場所。きれいな水が世界遺産の景観を成す（中屋組、表面取水設備や濁水フェンスを設置し、60年を迎える。合わとの意識で日々の管理）。2011年の紀伊半島大水害の後には、45万立方メートルに処理量を増やした。2011年から風屋ダムの水位低下を防止し、近畿地方整備局は「風屋ダムなどの治水協力で家屋の浸水が回避できた」と発表、仁坂吉伸和歌山県知事も「Jパワーなどの治水協定の内容は、おおむね暫定運用どおりと

治水利用先取り

風屋ダムと二津野ダムの土砂が流れ込み、川にダムが濁る現象。川にダムがあるため、浸水リスクを共同で土捨て場を整備し、20年まで毎年している。ダム湖に土砂が堆積し、さらに十津川村と新宮川水系の熊野古道の一部で「川の参詣道」とされている場所。きれいな水が世界遺産の景観を成す（中屋組、表面取水設備や濁水フェンスを設置し、60年を迎える。合わとの意識で日々の管理）。2011年の紀伊半島大水害の後には、45万立方メートルに処理量を増やした。2011年から風屋ダムの水位低下を防止し、近畿地方整備局は「風屋ダムなどの治水協力で家屋の浸水が回避できた」と発表、仁坂吉伸和歌山県知事も「Jパワーなどの治水協定の内容は、おおむね暫定運用どおりと



二津野ダムと、左から小竹雄大、熊谷騰、中屋寛彦、野口直彦の各氏

地域の工夫を全国に

水協力とその効果が認識され、住民の暫定運用への理解は広がっている。

メンテが変わる

60年の間にITや機器が大きく進歩し保守メンテナンスの方法も変わった。同社は、全国60カ所の水力発電所を北海道と埼玉、愛知の3拠点から遠隔制御している。発電機の状況はどこからでもパコンで確認できる。「故障などで失われていた設備の劣化度合いは独自の基準で数値化し判断する。ドローンや水中カメラも積極的に活用している。例えば急傾斜している水圧鉄管や放水路の内部状況も監視でき、ム放流や土捨て場の整備工事などに係ること



電源開発